

Exponentials of certain completions of the unitary  
form of a Kac-Moody algebra

愛媛大・理 須藤 清一  
(Kiyokazu Suto)

§0. 序  $\mathfrak{g}$  を, 対称化可能な Cartan 行列を持つ複素  
Kac-Moody 環,  $\mathfrak{f}$  をその unitary 実形とする.

[3] の中で我々は,  $\mathfrak{g}$  の随伴表現及び dominant  
integral な最高 weight を持つ既約表現の標準的な完備化  
における  $C^m$ -vectors の空間を自然な形で定義し, その簡単  
な特徴付けを与えた. この特徴付けを用いると, 各  
 $C^m$ -vectors の空間に自然に位相が入り,  $\mathfrak{g}$  の作用が連続に  
拡張される.

随伴表現の場合の各  $C^m$ -vectors の空間における  $\mathfrak{g}$  及  
び  $\mathfrak{f}$  の閉包をそれぞれ  $\mathfrak{g}_m, \mathfrak{f}_m$  とする.

本報告では,  $k_2$  の  $C^1$ -vectors への作用が  
exponentiable であり  $m = 0, 1, 2, \dots$  に対して  $\mathfrak{f}_{m+2}$  の  
exponentials が  $C^m$ -vectors の空間を不変にすることを示  
す. これは [3] で得られた,  $m = \omega$  に対する結果, 即ち,  
 $\mathfrak{f}_\omega$  の exponentials が  $C^k$ -vectors の空間 ( $k = 0, 1, 2,$   
 $\dots, \infty; \omega$ ) を全て不変にする, を拡張するものである.

§1. 記号と準備 本節の内容に関しては，詳しくは [1]

及び [3] を参照されたい．

$A$  を対称化可能な一般型 Cartan 行列とする． $\mathfrak{g}_R$  を  $A$  を Cartan 行列に持つ実 Kac-Moody 環， $\mathfrak{h}_R$  を  $\mathfrak{g}_R$  の Cartan 部分環とする．すると， $\mathfrak{g} = \mathbb{C} \otimes_R \mathfrak{g}_R$  は  $A$  を Cartan 行列とする複素 Kac-Moody 環， $\mathfrak{h} = \mathbb{C} \otimes_R \mathfrak{h}_R$  は  $\mathfrak{g}$  の Cartan 部分環になる．

$\Delta$  を  $(\mathfrak{g}, \mathfrak{h})$  の root 系， $\Delta_+$  を正 root の全体， $\mathfrak{g} = \mathfrak{h} + \sum_{\alpha \in \Delta} \mathfrak{g}^\alpha$  を root 空間分解とする．

$\mathfrak{n}_\pm = \sum_{\alpha \in \Delta_\pm} \mathfrak{g}^{\pm\alpha}$  とおく．分解  $\mathfrak{g} = \mathfrak{n}_- + \mathfrak{h} + \mathfrak{n}_+$  に関する  $\mathfrak{g}$  から  $\mathfrak{n}_\pm$ ， $\mathfrak{h}$  の上への射影をそれぞれ  $P_\pm$ ， $P_0$  とする．

$A$  を対称化可能としたから  $\mathfrak{g}$  上には standard invariant form  $(\cdot | \cdot)$  が存在する． $(\cdot | \cdot)$  の  $\mathfrak{h}$  への制限は非退化なので， $\mathfrak{h}$  から  $\mathfrak{h}^*$  の上への線型全単射  $\nu$  が

$$(h_1 | h_2) = \nu(h_1)(h_2) \quad \text{for } h_1, h_2 \in \mathfrak{h}$$

によって定まる．

$\mathfrak{g}$  上の反線型反同型  $\mathfrak{g} \ni x \longrightarrow x^* \in \mathfrak{g}$  で

$$h^* = h \quad \text{for } h \in \mathfrak{h}_R, \quad (\mathfrak{g}^\alpha)^* = \mathfrak{g}^{-\alpha} \quad \text{for } \alpha \in \Delta$$

$$(x^*)^* = x \quad \text{for } x \in \mathfrak{g}$$

を満たすものが存在する．すると unitary 実形  $\mathfrak{k}$  は

$$\mathfrak{k} = \{x \in \mathfrak{g}; x + x^* = 0\}$$

と定義される。

$\mathfrak{g}$  上の Hermitian form  $(\cdot|\cdot)_0$  を

$$(x|y)_0 = (x|y^*) \quad \text{for } x, y \in \mathfrak{g}$$

と定める。 $(\cdot|\cdot)$  の不変性により、 $(\cdot|\cdot)_0$  は

contravariant である。即ち

$$((\text{ad } x)y|z)_0 = (y|(\text{ad } x^*)z)_0 \quad \text{for } \forall x, y, z \in \mathfrak{g}$$

が成立つ。この性質により root 空間分解が  $(\cdot|\cdot)_0$  に関する直交分解であることがわかる。特に  $(\cdot|\cdot)_0$  は  $(\text{ad } \mathfrak{t})$ -不変であり、 $\mathfrak{n}_\pm$  は互いに直交する。更に [2] によれば、 $(\cdot|\cdot)_0$  は  $\mathfrak{n}_- + \mathfrak{n}_+$  上では正定値である。

$\lambda \in \mathfrak{h}^*$  を最高 weight に持つ既約最高 weight 表現を  $(\pi_\lambda, L(\lambda))$  とする。もし  $\lambda \in \mathfrak{h}_R^*$  ならば  $L(\lambda)$  上には非退化な contravariant Hermitian form  $(\cdot|\cdot)_\lambda$  が存在する。更に  $\lambda$  が dominant integral ならば  $(\cdot|\cdot)_\lambda$  は正定値である [2, Th.1]。

$\mathfrak{h}_R$  の基底  $\{h_i\}_i$  を

$$(h_i|h_j)_0 = \delta_{ij} \text{ or } -\delta_{ij} \quad \forall i, j$$

を満たすようにとる。 $\mathfrak{h}$  上の内積  $(\cdot|\cdot)_1$  で  $\{h_i\}$  を正規直交基底とするものを取り、次によって  $\mathfrak{g}$  全体に拡張する。

$$(x|y)_1 = (P_-(x)|P_-(y))_0 + (P_0(x)|P_0(y))_1 + (P_+(x)|P_+(y))_0$$

for  $x, y \in \mathfrak{g}$ .

すると次の様な  $\mathfrak{g}$  上の線型作用素  $T$  が存在する.

(1)  $T$  は  $(\cdot|\cdot)_1$  に関して unitary かつ self-adjoint. 従って involutive.

$$(2) (x|y)_0 = (x|Ty)_1 \quad \text{for } x, y \in \mathfrak{g}.$$

$$(3) 1 - T \leq 2P_0.$$

以下では,  $(\pi, V)$  を随伴表現  $(\text{ad}, \mathfrak{g})$ , または dominant integral な最高 weight  $\Lambda \in \mathfrak{h}_R^*$  をもつ最高 weight 表現  $(\pi_\Lambda, L(\Lambda))$  とする.  $(\cdot|\cdot)_\pi$  を上で導入した  $V$  上の内積とする. 即ち,  $\pi = \text{ad}$  ならば  $(\cdot|\cdot)_\pi = (\cdot|\cdot)_1$  であり,  $\pi = \pi_\Lambda$  ならば  $(\cdot|\cdot)_\pi = (\cdot|\cdot)_\Lambda$  である.

$(\pi, V)$  の weight の全体を  $P(\pi)$ , weight  $\mu$  の weight 空間を  $V_\mu$  とし,  $\underline{V} = \prod_{\mu \in P(\pi)} V_\mu$  とおく.  $\mathfrak{g}$  の作用は  $\underline{V}$  ままで自然に拡張されるが, 拡張された表現も  $\pi$  と書く.

$H(\pi)$  を  $V$  の  $(\cdot|\cdot)_\pi$  に関する完備化とする. すると  $H(\pi)$  は次の様にして  $\underline{V}$  の部分空間と看做される.

$$H(\pi) = \{(v_\mu)_{\mu \in P(\pi)} \in \underline{V}; \sum_{\mu \in P(\pi)} \|v_\mu\|_\pi^2 < +\infty\}.$$

§2.  $C^m$ -vectors 以下  $h_0 \in \mathfrak{h}_R$  を strictly dominant:

$$\alpha(h_0) > 0 \quad \forall \alpha \in \Delta_+$$

なる元として固定する. [2, Prop.3.1] と同様の方法で次の

命題を得る.

命題2.1 [3, Prop.2.1]. i)  $\exists C_1 > 0$  s.t.  $\forall x, y \in$

$\mathfrak{g}$

$$\|[x, y]\|_1 \leq C_1 (\|[h_0, x]\|_1 \|y\|_1 + \|x\|_1 \|[h_0, y]\|_1),$$

ii)  $\exists C_{1, \Lambda} > 0$  s.t.  $\forall x \in \mathfrak{g}, v \in L(\Lambda)$

$$\|\pi_\Lambda(x)v\|_\Lambda \leq C_{1, \Lambda} (\|x\|_1 \|v\|_\Lambda + \|[h_0, x]\|_1 \|v\|_\Lambda + \|x\|_1 \|\pi_\Lambda(h_0)v\|_\Lambda).$$

これから帰納的に

命題2.2 [3, Cor.2.3].  $x_1, \dots, x_m \in \mathfrak{g}, v \in L(\Lambda)$

とする.

i)

$$\|[x_1, \dots, [x_{m-1}, x_m] \dots]\|_1$$

$$\leq (m-1)! C_1^{m-1} \sum_{\substack{p_1, \dots, p_m \geq 0 \\ p_1 + \dots + p_m = m-1}} \prod_{j=1}^m \frac{1}{p_j!} \|(\text{ad } h_0)^{p_j} x_j\|_1.$$

ii)

$$\|\pi_\Lambda(x_1) \dots \pi_\Lambda(x_m)v\|_\Lambda$$

$$\leq (m+1)! C_{1, \Lambda}^m \sum_{\substack{p_1, \dots, p_m, q \geq 0 \\ p_1 + \dots + p_m + q \leq m}} \left\{ \prod_{j=1}^m \frac{1}{p_j!} \|(\text{ad } h_0)^{p_j} x_j\|_1 \right\} \times \\ \times \frac{1}{q!} \|\pi_\Lambda(h_0)^q v\|_\Lambda.$$

$C^m$ -vectors の空間を次の様に定義する.

定義2.3

$$H_0(\pi) = H(\pi),$$

$$H_m(\pi) = \{v \in H_{m-1}(\pi); \pi(x)v \in H_{m-1}(\pi) \quad \forall x \in \mathfrak{g}\},$$

$$H_\infty(\pi) = \bigcap_{m \geq 0} H_m(\pi).$$

命題 2.2 によって次は明らか.

命題 2.4 [3, Th.2.2].

$$H_m(\pi) = \{v \in \underline{V}; \pi(h_0)^m v \in H(\pi)\}$$

$$\forall m = 0, 1, 2, \dots$$

そこで,  $H_m(\pi)$  上の内積  $(\cdot | \cdot)_{\pi, m}$  を

$$(u | v)_{\pi, m} = \sum_{j=0}^m (\pi(h_0)^j u | \pi(h_0)^j v)_\pi$$

$$\text{for } u, v \in H_m(\pi)$$

によって定義すると  $H_m(\pi)$  は Hilbert 空間になる.  $H_\infty(\pi)$  上には射影極限位相を考える. 命題 2.1 によって  $\mathfrak{g}$  の作用は次の様に連続に拡張される.

命題 2.5 [3, Prop.3.2].  $m = 0, 1, 2, \dots$  とする.  $\mathfrak{g}$

の  $V$  への作用は連続な双線型写像

$$H_{m+1}(\text{ad}) \times H_{m+1}(\pi) \ni (x, v) \longrightarrow \pi(x)v \in H_m(\pi)$$

に拡張される. 特に  $H_\infty(\text{ad})$  は位相 Lie 環であり,  $H_\infty(\pi)$  に連続に作用する.

明らかに  $g \ni x \longrightarrow x^* \in g$  は  $H_m(\text{ad})$  上の involutive antilinear isometry に拡張される。そこで

$$f_m = H_m^u(\text{ad}) = \{x \in H_m(\text{ad}); x + x^* = 0\}$$

とおく。  $f_m$  は  $f$  の  $H_m(\text{ad})$  における閉包と一致する。

§3. Negative space inclusion  $H_m(\pi) \hookrightarrow H(\pi)$  は連続

だから、  $v \in H(\pi)$  に対して、  $F_v \in H_m(\pi)^*$  が

$$F_v(u) = (u|v)_\pi \quad \text{for } u \in H_m(\pi)$$

によって定義できる。この  $F_v$  の norm を  $\|v\|_{\pi, -m}$  とし、

$\|\cdot\|_{\pi, -m}$  による  $H(\pi)$  の完備化を  $H_{-m}(\pi)$  とする。  $H_{-m}(\pi)$

は  $\underline{V}$  の部分空間と看做せる：

$$H_{-m}(\pi) = \{(v_\mu) \in \underline{V}; \sum_{\mu} (\sum_{j=0}^m \mu(h_0)^{2j})^{-1} \|v_\mu\|_\pi^2 < +\infty\}.$$

また定義によって、  $(\cdot|\cdot)_p$  は  $H_m(\pi)$  と  $H_{-m}(\pi)$  の非退化な pairing を与える。

$x \in H_{m+1}(\text{ad})$  とする。命題2.5 により  $\text{ad } x^*$  は  $H_{m+1}(\text{ad})$  から  $H_m(\text{ad})$  の中への連続写像。一方 §1 の作用素  $T$  は  $H_m(\text{ad})$  上の可逆有界作用素に一意に拡張される。従って任意の  $y \in H_{-m}(\text{ad})$  に対して

$$H_{m+1}(\text{ad}) \ni z \longrightarrow ((T \circ (\text{ad } x^*) \circ T)z | y)_1$$

は  $H_{m+1}(\text{ad})^*$  の元を定める。よって  $H_{-m-1}(\text{ad})$  の元  $w$  が一意に存在して

$$(z|w)_1 = ((T \circ (\text{ad } x^*) \circ T)z|y)_1 \quad \forall z \in H_{m+1}(\text{ad}).$$

そこで  $(\text{ad } x)y = w$  とおく.

同様に  $H_{m+1}(\text{ad})$  の元の  $H_{-m}(\pi_\Lambda)$  への作用を

$$(u|\pi_\Lambda(x)v)_\Lambda = (\pi_\Lambda(x^*)u|v)_\Lambda$$

$$\text{for } x \in H_{m+1}(\text{ad}), u \in H_{m+1}(\pi_\Lambda), v \in H_{-m}(\pi_\Lambda)$$

によって定義する.

定義によって線型写像  $\pi(x): H_{m+1}(\pi) \longrightarrow H_m(\pi)$  の norm と  $\pi(x): H_{-m}(\pi) \longrightarrow H_{-m-1}(\pi)$  の norm は一致する.

#### §4. Exponentials of $\mathfrak{k}_m$ 's $m = 0, 1, 2, \dots$ とする.

$H_m(\pi)$  上の norm  $|\cdot|_{\pi, m}$  を

$$|v|_{\pi, m} = \sum_{j=0}^m \|\pi(h_0)^j v\|_\pi \quad \text{for } v \in H_m(\pi)$$

によって定める. すると

$$\|v\|_{\pi, m} \leq |v|_{\pi, m} \leq \sqrt{m+1} \|v\|_{\pi, m}$$

$$\forall v \in H_m(\pi)$$

だから  $|\cdot|_{\pi, m}$  は  $\|\cdot\|_{\pi, m}$  と同値な norm である. この norm で  $H_{m+1}(\pi)$  上の  $\mathfrak{k}_{m+1}$  の作用を評価すると次の補題を得る.

補題4.1.  $x \in \mathfrak{k}_{m+1}$  とする.

i)

$$|(1 - (\text{ad } x))y|_{\text{ad}, m} \geq (1 - C_1 2^{m+1} |x|_{\text{ad}, m+1}) |y|_{\text{ad}, m}$$



$$\forall y \in H_{m+1}(\text{ad}).$$

ii)

$$\|(1-\pi_{\Lambda}(x))v\|_{\Lambda, m} \cong (1-C_{1, \Lambda} 2^{m+2} \|x\|_{\text{ad}, m+1}) \|v\|_{\Lambda, m}$$

$$\forall v \in H_{m+1}(\Lambda).$$

ただし,  $H_k(\Lambda) = H_k(\pi_{\Lambda})$ ,  $\|\cdot\|_{\Lambda, k} = \|\cdot\|_{\pi_{\Lambda}, k}$  ( $k = 0, 1, 2, \dots$ ).

一方 negative space への作用に関しては次の様な評価を得る.

補題4.2.  $\exists c_m(\pi), c'_m(\pi) > 0$  s.t.  $\forall x \in k_{m+1}, v \in$

$H_{-(m-1)}(\pi)$

$$\|(1+\pi(x))v\|_{\pi, -m} \cong c_m(\pi)(1-c'_m(\pi)\|x\|_{\text{ad}, m+1})\|v\|_{\pi, -m}.$$

$x \in k_{m+2}, \varepsilon \in \mathbb{R}$  とする. 定義によって

$1+\varepsilon\pi(x): H_{-m}(\pi) \longrightarrow H_{-m-1}(\pi)$  が単射

$\iff (1-\varepsilon\pi(x))H_{m+1}(\pi)$  が dense in  $H_m(\pi)$ .

従って補題4.2により  $|\varepsilon|$  が十分小さければ

$(1-\varepsilon\pi(x))H_{m+1}(\pi)$  は  $H_m(\pi)$  で稠密である. これと補題4.1

を合せて

補題4.3.  $x \in k_{m+2}, \varepsilon \in \mathbb{R}$  とする.  $|\varepsilon|$  が十分小さけ

れば  $H_m(\pi)$  上の有界作用素  $R_\pi(x; \varepsilon)$  で

$$R_\pi(x; \varepsilon)(1 - \varepsilon\pi(x))v = v \quad \forall v \in H_{m+1}(\pi)$$

となるものが一意に存在する。更に

$$|R_\pi(x; \varepsilon)|_{op, m} \leq (1 - C|\varepsilon x|_{ad, m+1})^{-1}.$$

ただし,  $|\cdot|_{op, m}$  は  $|\cdot|_{\pi, m}$  に関する作用素 norm で,  $C = C_1 2^{m+1}$  (if  $\pi = ad$ ), or  $C_{1, \Lambda} 2^{m+2}$  (if  $\pi = \pi_\Lambda$ ).

これにより [4, Chap IX] の criterion が適用できて次の定理を得る。

定理 4.4.  $m = 0, 1, 2, \dots$ ,  $x \in \mathfrak{k}_{m+2}$  とする。  $H_m(\pi)$  上の有界作用素からなる 1-径数群  $e^{t\pi(x)} = \exp(t\pi(x))$ ,  $t \in \mathbb{R}$  でその無限小生成作用素が  $\pi(x): H_{m+1}(\pi) \longrightarrow H_m(\pi)$  の閉包であるようなものが一意に存在する。更に

$$|e^{\pi(x)}|_{op, m} \leq \exp(C|x|_{ad, m+1}).$$

もちろん,  $m < m'$  のとき  $x \in \mathfrak{k}_{m'+2}$  に対して  $H_m(\pi)$  上の  $e^{\pi(x)}$  と  $H_{m'}(\pi)$  上の  $e^{\pi(x)}$  は  $H_{m'}(\pi)$  上では一致する。従って上の定理は, 言葉をかえていえば,  $H(\pi)$  上で定義された  $x \in \mathfrak{k}_{m+2}$  の exponential  $e^{\pi(x)}$  が部分空間  $H_1(\pi), H_2(\pi), \dots, H_m(\pi)$  を全て不変にすることを主張している。

さて  $x, y \in \mathfrak{k}_{m+3}$ ,  $v \in H_{m+1}(\pi)$  とすると定理 4.1 によ

り

$$\begin{aligned} & \frac{1}{\delta} \{ e^{(t+\delta)\pi(x)} e^{(t+\delta)\pi(y)} v - e^{t\pi(x)} e^{t\pi(y)} v \} \\ &= e^{(t+\delta)\pi(x)} \left\{ \frac{1}{\delta} (e^{(t+\delta)\pi(y)} v - e^{t\pi(y)} v) - \pi(y) e^{t\pi(y)} v \right\} \\ & \quad + e^{(t+\delta)\pi(x)} \pi(y) e^{t\pi(y)} v + \frac{1}{\delta} \{ e^{(t+\delta)\pi(x)} \} e^{t\pi(y)} v \\ & \longrightarrow e^{t\pi(x)} \pi(x+y) e^{t\pi(y)} v \quad (\delta \longrightarrow 0) \quad \text{in } H_m(\pi). \end{aligned}$$

補題4.5.  $\forall x, y \in \mathfrak{k}_{m+3}, v \in H_{m+1}(\pi)$  に対して

$$\frac{d}{dt} e^{t\pi(x)} e^{t\pi(y)} v = e^{t\pi(x)} \pi(x+y) e^{t\pi(y)} v$$

in  $H_m(\pi)$ .

従って

$$e^{\pi(x)} e^{\pi(y)} v - v = \int_0^1 e^{t\pi(x)} \pi(x+y) e^{t\pi(y)} v dt$$

in  $H_m(\pi)$ .

C を補題4.3 の通りとすると

$$\begin{aligned} & |e^{\pi(x)} e^{\pi(y)} v - v|_{\pi, m} \\ & \leq \int_0^1 e^{Ct|x|_{ad, m+1}} C|x+y|_{ad, m+1} e^{2Ct|y|_{ad, m+2}} |v|_{\pi, m+1} dt. \end{aligned}$$

結局次の命題を得る.

命題4.6.  $m = 0, 1, 2, \dots, x, y \in \mathfrak{k}_{m+3}, v \in$

$H_{m+1}(\pi)$  とすると

$$\begin{aligned} & |e^{\pi(x)} e^{\pi(y)} v - v|_{\pi, m} \\ & \leq C e^{C(|x|_{ad, m+1} + 2|y|_{ad, m+1})} |x+y|_{ad, m+1} |v|_{\pi, m+1}. \end{aligned}$$

特に  $\exp: \mathfrak{t}_{m+3} \ni x \longrightarrow e^{\pi(x)} \in B_S(H_m(\pi))$  は,  $\mathfrak{t}_{m+3}$  の  $|\cdot|_{ad, m+2}$  について有界な任意の部分集合上で,  $|\cdot|_{ad, m+1}$  について一様連続. ただし  $B_S(H_m(\pi))$  は  $H_m(\pi)$  上の有界作用素全体に強位相を考えたもの.

この連続性によって [3, §5] で与えた exponentials の満たす交換関係が次の様に拡張される. まず連続性によって

命題4.7 (cf. [3, Prop.5.4])  $\forall x \in \mathfrak{t}_4, y \in H_1(ad)$

$$e^{\pi(x)} \pi(y) e^{-\pi(x)} = \pi(e^{(ad \ x)} y).$$

従って, 二つの一径数群  $e^{\pi(x)} e^{t\pi(y)} \dots e^{-\pi(x)}$  と  $\exp(t\pi(e^{(ad \ x)} y))$  ( $x \in \mathfrak{t}_4, y \in \mathfrak{t}_2$ ) が同じ無限小生成作用素を持つことになり, 結局次を得る.

命題4.8 (cf. [3, Prop.5.5])  $\forall x \in \mathfrak{t}_4, y \in \mathfrak{t}_2$

$$e^{\pi(x)} e^{\pi(y)} e^{-\pi(x)} = \exp \pi(e^{(ad \ x)} y).$$

## 参考文献

- [1] V. G. Kac, Infinite dimensional Lie algebras, Birkhäuser, 1983.
- [2] V. G. Kac and D. H. Peterson, Unitary structure in representations of infinite dimensional groups and a convexity theorem, Invent. Math., 76 (1984), 1-14.
- [3] K. Suto, Differentiable vectors and analytic vectors in completions of certain representation spaces of a Kac-Moody algebra, J. Math. Kyoto Univ., 28 (1988), 633-659.
- [4] K. Yosida, Functional analysis, Springer-Verlag, 1980.